

夏の楽しみはといえば やはり夏祭りですね。小田原では小田原城のお堀を彩る小田原ちょうちん祭り 早川港でのみなと祭り 酒匂川花火大会などで賑わいます。皆様の地域の夏まつりも連日賑やかなことと思います。8月の新九郎は、夏らしい内容で充実しています。お子様向けの書店ならではのイベントも予定されています。どうぞ 今年の夏もお元気で、素敵な夏の思い出を残してください。

新九郎 8月の展覧会のご案内

August

会 期	展 覧 会 名	見 どころ
8月1日 10時から13時 8月2日 10時から18時 8月3日 10時から16時	増田昭一 戦争孤児の物語 原画展	増田昭一著「戦場のサブちゃんと言」(2009年8月15日発行)の刊行を記念しての原画展。1日14時からは増田さんが語る「戦争孤児の物語」(入場無料)。15時30分からは増田さんを囲んでの交流会があります。(参加費1000円)
8月4日(火)～7日(金)	夏休み子供フェスティバル	書店ならではの夏休みお子様向きのワークショップです。
8月8日 14時から16時	「平安時代の女性たち」 講師 服藤早苗 (埼玉学園大学教授)	「西相模女性の歴史」の刊行を記念しての講座です。 第1回は原始から中世の執筆を担当した服藤早苗(埼玉学園大学教授)さんが講師です。第2回は10月の予定。
8月9日(日) 17時半から20時20分	ウクレレの夕べ 入場料1000円 (飲み物おつまみ付き)	今年も新九郎にウクレレバンドがやってきます。 長谷川マコトとスーパーウクレレバンド。賛助演奏もお楽しみください。 友の会ではビールとおつまみの販売を致します。
8月10日(月)11日(火)	夏休み子供フェスティバル	書店ならではの夏休みお子様向きのワークショップです。
8月21日(金)18時	新九郎デッサン会	毎月1回のデッサン会です。
8月26日(水)～31日(月)	僖 展	新九郎では初の若手作家7人によるグループ展です。平面・立体作品など。

近隣・友の会会員の展覧会情報

飛鳥画廊	8月5日～10日	第86回西ゆり美術展
はげ八館 店内	8月1日～31日	絵手紙/水彩画：心友会展
うつわ 菜の花	8月1日～10日 8月15日～23日	プラチナのためいき 加藤尚子のガラス ラオスの布展
相模原市民ギャラリー	7月18日～8月22日	「ただいま展」 友の会 横井山泰さん出品中 入場無料

ようこそ平塚美術館

平塚美術館学芸員 勝山 滋



いわさきちひろ(1918-1974)の企画展が8月30日まで開催中です。だれが見てもそれとわかる可愛らしい子どもたち、とくに晩年は水彩で簡略化した描き方のなかで黒い瞳が画面を引き締めて、たしかな表現で子どもたちのしぐさが捉えられています。この作品では二人の心の交流が巧みな手の表現によって描かれています。県内初の本格的なちひろ展をぜひごらんください。

いわさきちひろ『お姉さんと赤ちゃん』



午後7時、夕闇迫る昔懐かしい商店街に、色鮮やかな絵屏風が1枚、また一枚と並べられてゆく。にぎやかな祭り見物の人影と、和燭燭の炎のゆらめきが、幕末土佐の絵師、絵金とその一門による芝居絵に命を吹き込む。高知県赤岡絵金祭りのクライマックスである。見物客が絵の前に集まると、高知弁が飛び交い始める。「この人、何しゆうが?」「網投げちよるがや。」
絵金も、こんな風に話したのだろうか。

赤岡の人々は、まるで身内の自慢話でもするかのように絵金を語る。絵の横に腰掛けて、興味ありそうな見物客に、絵の見所を説明して聞かせる。客の質問に答え、遅れてきた者が、「もう一度最初から聞かせてください。」と請えば、「え?また最初から?」と呆れたような顔をしながらも、嬉しそうに客の前へと進み出る。

絵の中には、カタログではわかりにくい沢山の仕掛けや笑いが隠されている。それは衣装や墓石の中にさりげなく書き込まれた画号であり、燭の炎にキラキラと雲母を輝かせる黒髪であり、また醜い争いを繰り広げる人間を尻目に、せつせと交尾に励む猫である。飽くことなく眺めていけば、時の過ぎるのはあっと

いう間だ。

赤岡には人懐こい人が多い。熱心に見ていけば、すぐに話しかけられる。「ずいぶん長い間みてるのね。」「ええ、好きなんです。」「初めて?」「いえ、2度目で。」「はまったね。」「はまりました。」「どちらから?」「神奈川からです。」「それは遠くから、高知の人ってどう?」「いい人ですよ、みんな。」「明るいでしょ。」「ええ、とても。」「明るい。みんなおほか。どうぞゆっくり見て行ってください。」と笑う。
地元テレビ局のレポーターがマイクを向けて、「絵の感想を聞かせてください。」という。「こういうところで見せていただいて、まるで生きてみたいんです。感激しました。」というようなことを、少々慌てつつ述べると、嬉しそうに礼を言われた。彼らもまた、祭りを楽しんでいる。

絵金の絵は、血みどろ絵と呼ばれることがある。それは絵金の芝居絵ならではの、おどろおどろしい「血赤」によるものである。彼はこの色を出すために、独自の手法を編み出したのだった。だが、不思議な事に絵金の芝居絵には、薄気味の悪さや陰惨さといったものを感じない。土佐のおおらかな気質によるものなのか。修羅場の中に隠された笑い絵、勢いに乗って走る筆、鮮烈な色使い、血にまみれながらも、どこか官能的な登場人物たちの表情が、見る者の目を釘付けにする。

土佐では昔、海から災いがやって来るものと信じられていたという。その災いを追い払うため、赤岡の人々は迫力ある芝居絵屏風を、祭りの時には、家の外に向けて立て並べた。鬼ですら恐れをなして退散するおどろおどろしい血赤は、赤岡の町を守ってきたのである。

海からの潮風、和燭燭の油煙、見物客はその気になれば、いくらでも屏風に近づくことができる。年に一度、たった2時間の間とはいえ、傷みやすい日本画にとっては過酷な条件である。

しかし、土佐芝居絵屏風は祭りの中にあるもの。そして赤岡の祭りには、本物の絵金の芝居絵を立て並べるものなのである。絵を守る人々の心意気と、文化の厚みがそこにある。

だからこそ絵屏風の前に立つ者は、写真のフラッシュ撮影を控えるなど、絵に配慮した作法を心がけるべきだろう。いつまでも赤岡の人々と、そして「絵金さん」と共に祭りを楽しむために。

9時を告げるアナウンスとともに、燭の炎が消えてゆく。絵屏風は1枚1枚畳まれて、この祭りの期間が過ぎれば絵金蔵へと帰り、1年の眠りにつく。気が付けば見物客も徐々に引き揚げ始め、並んだ屋台は既に店じまいの用意をしている。

2時間も見ていたはずなのに名残惜しさは人一倍で、別れても、すぐにまた会いたくなる絵金である。

※ 絵金の波乱に満ちた生涯や絵金祭りについては、絵金蔵のHPに詳しい。それだけでも1本のレポートになってしまいそうなボリュームなので、ここでは割愛したが、彼の人生はまるでドラマのようで、その天才ぶりを伝えるエピソードも満載なので、ご覧いただければ幸いです。

参考文献 近森敏夫『絵金読本』(改訂)、高知県:香南市商工水産課 2006年 絵金蔵『収蔵品目録 絵金蔵』高知県:赤岡町 2005年

新九郎壁塗りボランティアのお願い

日時 8月22日(土) 9:00 - 16:00

持ち物 汚れてもよい服装 軍手 新聞紙

新九郎では 夏休みの休廊日を使い3年に1回壁のメンテナンスを行っています。今年も友の会の有志の方々と壁塗りをします。いつもの絵筆を刷毛に持ち替えて、壁塗りを応援してください。道具はすべて用意があります。汚れてもよい服装でお越しください。飲み物・昼食は準備させていただきます。

ギャラリー 新九郎 木下

7月は飯室哲也展で幕を開けました。10年ぶりの木の枝によるインスタレーション作品。新九郎の全空間を使い、みずみずしくダイナミックに構成、展開されました。ハープとパッファローの様な美しい形態が快く残像となり今も語りかけてきます。

西さがみ街なみ・ふる里再発見!展も7回目を数えることとなりました。今年は作品数、来場者も大幅に増えました。初出品の方も増え「好きで描いているがグループにも入っていないので発表の機会がない、この展覧会はとてもありがたいです。」とおっしゃっていました。

会場当番のボランティアさんも各会場に詰めてくださいました。初めてという方には「すごく楽しかったです。」との感想をいただきました。昨年までとは明らかに違う広がり、手ごたえを感じました。街の活性化で始めた展覧会ですが、理想とする入り口にやっとたどりついたという感じです。街に人が行き交い、溢れる人で会場に団欒の花が咲く。そんなイメージを頭に描きながら、来年に向け進んでいきたいと思っています。 木下泰徳